

校長室だより

No. 21

平成 27 年 10 月 2 日(金)

強く やさしく

六ツ美中部小学校校長

か とう よし かず
加 藤 嘉 一

学芸会の取り組みが始まって

このごろ各教室を見て回ると、机やいすが教室の片側に固められ、子供が腰を下ろし先生の話聞いていたり、グループごとに分かれていたりしています。先生や子供の片手には、学級・学年独自の台本が。みんなで合わせ読みをしたり、先生が範読したりしています。



【昨年度学芸会より】

役決めや楽器の担当、照明などの係分担もそろそろ決まってきたことと思います。そうそう。自分が小学校の頃を思い出しました。

私が1年生のときは、教室で「おおきなかぶ」を行い、何人かいたねずみ役の一人。(なんとそのときの担任の先生は、本校 25 代校長：鶴田紀美子先生です。)セリフは、「チュー！」の一言で、あとは「うんとこしょ。どっこいしょ。」とほかの動物と声を合わせ、かぶが抜けたら転びます。6年生では、「ビルマの豎琴」の劇に取り組みました。そのときは、セリフなしのビルマの現地人役。いわばエキストラです。加えて裏方の音響係を担当しました。私の親にしてみれば「出番もほとんどなく、見甲斐もない」と思ったでしょうが、「ちゃんと、がんばりな」と言って見に来てくれました。今でも覚えています。日本兵の合唱を聞きたくて柵の前に集まる現地人役を、当時の現地人だったらどうしているだろうと自分なりに考え、一生懸命身体の動かし方を工夫しました。

「おおきなかぶ」は、ほぼ本の絵や内容、そして当時の教室での演技も覚えています。「ビルマの豎琴」は、劇にするにはとても長いお話ですが、この本のこと話題になるとなんとなく誇らしくなったり、主人公の水島上等兵の決断と一緒に日本へ帰ろうと叫ぶ日本兵の仲間の気持ちを改めて想像したり、当日の演技を思い出すことがあります。

学芸会に願うこと

学芸会は古くから多くの学校で行われています。総合的な学習が導入され、いつかその学習発表会になり、その役割と目的を変えた学校もありますが、

日常の学習の取り組みや成果を地域の方に披露し、教育活動を理解してもらうことは、ほぼ変わっていないと思います。本校でも、目的は変わりません。

学芸会の劇や音楽作りは、多くの教科（一般的に国語・音楽・図工・体育・総合的な学習）の内容・要素を含むことが多く、様々な表現活動をさせる意義が大きいとされる小学校では、価値ある取り組みです。

そのなかでも、特に、私は身体表現することを大切にしてほしいと願っています。劇や音楽は、必ず作者のメッセージがあります。国語的に言えば、主題と言えるかもしれませんね。本や音楽の原作を頭でとらえるだけでなく、身体でどう表現するか。原作者が伝えなかった登場人物の感情やその場の様子を実際に身体で表すこと、作詞家や作曲家が伝えなかった喜びや悲しみ、想いやイメージを身体で表現すること。そこにはないものや風景を、身体を使ってどう表すか。感性と想像力と創造力が必要です。



また、教育心理学の専門家、大河原美以先生（東京学芸大学教授）の講演で、「きれいな子供」の育ちについて、こんな話を聞いたことがあります。例えば、幼児がアスファルトの道で走っていて、すてんと転んだとき、それを見たみなさんはどうするのでしょうか。「きれいな子供」の育ちを分析していくと、この状況のときに、一番信頼を寄せる親が、「痛くない！」と即座に叫び、泣かせず自分で起きあがるまで待つケースが多かったそうです。つまり、幼児期に、自分の痛くて悲しい感情を受け止めてもらうことなく、泣くという身体表現も止められ、言葉も教えられなかった。これを繰り返していたケースが多いということです。もちろん、「きれいな子供」はこれだけが要因ではないのですが。また、小学校の図工の粘土作りで、自分ではなく友達がほめられたときに友達の作品をたたいて壊す子供がいたそうです。その子供は、自分の作品も認めてほしいという感情をうまく消化したり、表現したりすることができなかったわけです。そうしたときは、「今、どこが苦しかったの。身体のどこがもやもやしていたの」と胸などに手を当てさせたいうえで、「そこが苦しかったんだね。そういうときは『悲しかった』と言っていいのよ」と、接してあげてほしいと聞きました。

私もそれだけ心と身体をつないだり、心と身体と言葉をつないだりすることの意味は大きいと思っています。

子供たちが、台本や音楽をどう解釈し、どう身体で表現することができるか。発達段階によって、自分で考え表現できることは変わりますが、身体で表現することに重きをおきたいと思います。